

エコツーリズム推進基本方針 に対する提言（案）

～たびと創る持続的な地域社会を目指して～

平成20年2月21日

エコツーリズム推進に関する基本方針検討会

はじめに	1
第1章 エコツーリズムの推進に関する基本的方向	2
1 わが国のエコツーリズムを取り巻く状況	2
(1) わが国における推進の経緯	2
(2) これまでの取組みの成果と課題	2
2 わが国におけるエコツーリズムの基本的考え方	3
(1) エコツーリズムを推進する意義	3
ア 自然環境の保全と自然体験による効果	3
イ 地域固有の魅力を見直す効果	3
ウ 活力ある持続的な地域づくりの効果	3
(2) エコツーリズムへの取組み方	3
(3) エコツーリズムにおける基本的な考え方	4
3 わが国のエコツーリズムが目指す方向性	4
(1) エコツーリズムの推進によって長期的に目指す姿	4
ア 地域では	4
イ 参加者は	5
ウ 国内では	5
エ 海外へは	5
(2) 重点的に取り組むべき当面の課題	5
ア 人材育成	5
イ 地域への支援	5
ウ 戦略的広報	5
エ 科学的評価方法に関する調査研究	5
オ 他施策との連携強化	6
第2章 エコツーリズム推進協議会に関する基本的事項	7
1 協議会の組織化	7
(1) 幅広い主体が参加することの必要性	7
(2) 協議会の体制	8
2 協議会の運営	8
3 活動状況の公表・報告	8
第3章 エコツーリズム推進全体構想の作成に関する基本的事項	9
1 エコツーリズムを推進する地域	9
2 対象となる自然観光資源	10
3 エコツーリズムの実施の方法	10
(1) ルール	11
(2) ガイダンス・プログラム	11
(3) モニタリング・評価	12

(4) その他	13
ア 情報提供	13
イ 人材育成	13
4 自然観光資源の保護・育成	14
(1) 特定自然観光資源	14
ア 特定自然観光資源の指定	14
イ 立ち入り制限による利用調整	14
ウ その他の保護・育成の措置	15
エ 保護・育成の方法の公表	15
(2) その他の自然観光資源	15
5 協議会の参加主体	16
6 その他エコツーリズムの推進に必要な事項	16
(1) 環境教育の場としての活用と普及啓発	16
(2) 他の法令や計画等との関係・整合	16
(3) 農林水産業や土地所有者等との連携・調和	17
(4) 地域の生活や習わしへの配慮	17
(5) 安全管理	17
(6) 全体構想の公表	17
(7) 全体構想の見直し	18
第4章 エコツーリズム推進全体構想の認定に関する基本的事項	19
1 認定の趣旨	19
2 認定の手続き	19
3 認定基準	19
4 認定の取消し	20
5 認定全体構想の周知	20
第5章 生物の多様性の確保等のエコツーリズムの実施に当たって配慮すべき事項その他 エコツーリズムの推進に関する重要事項	21
1 生物多様性の確保	21
2 普及啓発の推進	22
3 子どもの視点に立った継続的な取組みの推進	22
4 技術的助言	23
5 エコツーリズムの推進体制	23

はじめに

人間活動から生じた環境負荷は、産業革命以降、急速に拡大・増大し、地球規模で生態系を劣化させ、今や私たちの生活だけでなく将来の世代にまでさまざまな危機を及ぼしています。しかし、この人類がかつて直面したことのない最大の試練に対し、知識としての理解は広がりつつあるものの、一人ひとりが主体的、積極的に行動を起こしたり、ライフスタイルを見直し変えていくなど、意識への浸透や行動への転換といった大きな転換にまで至っていません。これは、人間が自然生態系の構成要素の一つであること、自分自身と地球がつながっているという実感が決定的に不足しているからだと言えます。

また、昨今、規律意識や道徳心、自立心の低下が指摘されています。高度な電子化、情報化による仮想体験の機会が増すなど物質的な豊かさの中で、自分と他の生きものなどをはじめとした自然との「つながり」を想像し、意識することが希薄になり、実体験を重ねる機会は奪われています。こうした状況の中、責任感や思いやりの心、自然や伝統文化を大切に作る心などの「豊かな人間性」が失われつつあることが懸念されています。

このような問題の解決には、将来を担う子どもたちをはじめ、すべての人たちが原始的で雄大な自然の中での自然の偉大さ・荘厳さや人の暮らしと自然が織りなしてきた里地里山、里海等における、その地域固有の人と自然の「つながり」を目で見るだけでなく、「耳・鼻・口・肌」の五感を使って自然と直にふれあうことが必須です。

近年、観光の分野から人と地域の自然との「つながり」を取り戻す動きが見られるようになってきました。既に、いくつかの地域においては、こうした新たな観光のあり方に地域ぐるみで取り組んでいます。

こうした地域の自然や文化を保全しながら、観光旅行者に体験させる「エコツーリズム」は、単に一過性の体験にとどまらず、観光旅行者に地域の自然との「つながり」をもたらします。さらには、私たち一人ひとりが地域の環境を介して地球環境とつながる糸口となるのです。また、地域ぐるみの取組みは、地域にも「つながり」を生み、地域が元気になっていくことも期待できます。

昨年6月にエコツーリズム推進法が議員立法により制定され、エコツーリズムに取り組む地域を国が「認定エコツーリズム推進地域(仮称)」として認証する制度が始まったところです。

この基本方針は、人と自然、人と人の「つながり」を取り戻し、元気な社会を作っていくため、エコツーリズムが目指す方向性を示すとともに、地域が推進する際の基本的な事項を定めたものです。

この序章を読んでいるあなたの地域にも、その素材となるものは必ずあります。今こそ、そのすばらしい素材を活かして、地球環境のため、子どもたちのために、あなたの地域を活用し、発信していくことに挑戦してみませんか。

第1章 エコツーリズムの推進に関する基本的方向

1 わが国のエコツーリズムを取り巻く状況

(1) わが国における推進の経緯

世界におけるエコツーリズムは、途上国の支援の一環として、開発から自然を保護しようとする産業転換を促す考え方として始まり、その後持続的な観光振興を目指す概念として論じられてきました。

日本では、平成に入って民間事業者がエコツアーを始め、その後、民間推進団体の設立が相次ぐなど、持続可能な地域づくりや新たな観光の取組みとして全国的な普及の動きが加速しました。

そして、平成15年から16年にかけて環境大臣を議長とする「エコツーリズム推進会議」が設けられ、国をあげたエコツーリズムの推進が始まりました。同会議で「5つの推進方策」が取りまとめられ、これに基づいたエコツーリズムの普及と定着に向けた各種具体的な取組みが進められました。

この一つである「エコツーリズム推進モデル事業」では、わが国の実情に合わせ、「豊かな自然の中での取組み」、「多くの来訪者が訪れる観光地での取組み」、「里地里山の身近な自然、地域の産業や生活文化を活用した取組み」の3つに分類した上で、平成16年度から18年度の3年間、選定された13の地域がそれぞれの特徴を活かした取組みを進めました。

(2) これまでの取組みの成果と課題

モデル地区以外にも全国的にエコツーリズムに取り組む地域が増えつつあり、地域協議会での合意形成や資源調査、基本的な実施計画の作成、プログラム開発など地域で総合的に推進する体制づくりが多く見られるようになってきました。

しかし、普及という点では、国民にエコツアーの楽しさや意義が十分に理解されているとはいえ、いまだ発展途上にあります。

また、推進してきた地域でも、協議会における合意形成や継続した運営の難しさ、地域の資源を十分に活かされていないこと、ガイドやプログラムの質をどう担保するかなど、なお多くの課題が残されています。

2 わが国におけるエコツーリズムの基本的考え方

(1) エコツーリズムを推進する意義

ア 自然環境の保全と自然体験による効果

人が自然の神秘とふれあうとき、何ものにも代えがたい深い感動や癒しを得ることができます。また、子どもの原体験としての「五感で感じる自然体験」の必要性も指摘されています。こうした自然とのふれあいの必要性が唱えられる一方で、一時的な入込者の集中など不適切な利用による自然環境の悪化が懸念される地域もあります。エコツーリズムにおいては、利用に関するルールの設定により自然観光資源の劣化が防がれるとともに、ガイドの案内を通じて、楽しみの中で自然への理解を深めることで、観光旅行者や地域住民等の意識が高まり、さらにそれが地球環境問題への興味や環境保全に関する行動につながっていきます。

イ 地域固有の魅力を見直す効果

日本は、亜熱帯から亜寒帯、原生自然から里地里山まで、自然と文化が一体となった多種多様な自然や風土を有しています。豊かで荒々しい自然と共生してきた先人たちの智慧と伝統は、各地に固有の特徴を持って息づいています。それは地域に深く浸透し、人々の暮らしや生き方に影響してきました。自然の魅力そのものに加え、このような自然と密接に関わってきた生活文化もまた、観光旅行者を強く惹きつける魅力なのです。このように多彩で特徴あるものをあらためて見直すことで、エコツーリズムの題材にふさわしい自然観光資源にすることができ、さまざまな体験を提供することが可能となります。

ウ 活力ある持続的な地域づくりの効果

地域においては、この自然観光資源を活用することにより、現在多様化する観光需要に対応できる魅力が増すだけでなく、新たな観光振興も可能となります。その結果、雇用の確保や既存の観光産業との相乗効果、経済波及効果などに加え、地域資源の再認識や観光旅行者とのふれあいなどを通じて、住民が地域に誇りを持つなど、活力ある持続的な地域づくりの効果がもたらされます。

(2) エコツーリズムへの取組み方

法に定める4つの基本理念は、「自然環境の保全」、「観光振興」、「地域振興」、「環境教育の場としての活用」とされています。この理念に沿って地域でエコツーリズムを推進する一般的な取組みは、

- 行政だけでなく、観光や自然保護、農林水産業をはじめとする関連産業に携わる人たちや住民などが一堂に会し、話しあい、
- 地域が伝えたい魅力(=地域の宝)をみんなで見つめ直し、あるいは探し出し、大切にしながら磨き、

地域外の人である観光旅行者にうまく伝え、
観光旅行者が得た感動をさらに宝を磨く原動力とすることで、
地域経済に活力を与えつつ、他産業との連携などの波及効果を広げる
という一連の行為となります。

(3) エコツーリズムにおける基本的な考え方

これらを具体的に実現させていくには、以下の視点が基本となります。

「大切にしながら」という視点

自然環境や生活文化を保全しようとする考え方がエコツーリズムの取組みすべてにおける考え方の基盤となります。

「楽しみながら」という視点

おもてなしの心を持って観光旅行者に楽しんでいただくことが前提であり、このことで自然や地域を好きになる人が増え、継続性が出てきます。

「地域が主体」という視点

地域を中心として観光旅行者を迎える関連する人たちすべてが協力しあいながら、自ら考え、行動することが求められます。

さらに、次の点に配慮することも必要となります。

- ・順応的管理の視点（ルール、実施、モニタリング、科学的な評価、見直しというサイクル）
- ・継続的かつ計画性を持った取組みの視点（目標を持ち、徐々に発展させていくという考え方）
- ・農林水産業をはじめとする関連産業との調和や地産地消の取組みなどとの有機的な連携
- ・他の法令や計画等との整合・連携による、良好な相互作用

3 わが国のエコツーリズムが目指す方向性

(1) エコツーリズムの推進によって長期的に目指す姿

わが国において、エコツーリズムを推進する長期的な目標、つまり将来的に目指す姿は、次に挙げることが実現していることが考えられます。

ア 地域では

地域では、観光旅行者、ガイド、地域住民、観光事業者、ボランティアなどの関係団体がそれぞれ関わり、協力することで地域が結束する（コミュニティの再生）とともに、地域外の人たちとの交流により新しいつながりが生まれます（コミュニティの発展）。このようなつながりが新しい経済的な仕組みとして地域に根付くことで、自然環境の保管理を呼び起こすとともに、地域の経済的精神的な自立（と自律）を促

し、地域の子どもにも誇りや愛着が生まれ、受け継がれていきます。

そして、環境に配慮した手法を用いて、環境に負荷をかけない「ワイズユース」が実現します。

イ 参加者は

住民や観光旅行者、子どもなどのプログラム参加者は、各々の段階に応じた間口の広い体験や奥の深い体験を通じて、環境意識を持ち帰ります。地球環境に思いをさせ、行動する人たちが増えることによって、人々のライフスタイルに良い変化が生まれます。

ウ 国内では

このような取組みが地域の中で深まる「持続可能な地域社会」が地域から地域へと伝播していくことで、それぞれがつながりを持ち、それらが国内全体で集合することで「持続可能な社会」が実現します。

また、観光全体のあり方が持続可能な観光に変容していきます。

エ 海外へは

さらに、海外の人たちに自然と共生してきたわが国の真の魅力を伝えるとともに、この考えが世界に向けて発信されます。

(2) 重点的に取り組むべき当面の課題

上記の姿を実現していく上で、重点的に取り組むべき当面の課題は以下のとおりです。

ア 人材育成

- ・ガイドの育成
- ・地域コーディネーターの資質向上
- ・地域の人材育成事業に対する講師派遣

イ 地域への支援

- ・協議会の適切な運営（効果的な技術的助言、指導としての専門家派遣）
- ・アドバイザー派遣

ウ 戦略的広報

- ・認知度を高め、観光産業としての採算性を向上させるための重点的・戦略的情報発信
- ・「エコツーリズム」のイメージアップ

エ 科学的評価方法に関する調査研究

- ・実践的なモニタリング・評価手法等の研究

オ 他施策との連携強化

- ・学校教育、生涯学習施策との連携
- ・農山漁村の活性化施策との連携
- ・広域的な観光圏施策との連携
- ・ニューツーリズムの創出・流通施策との連携

第2章 エコツーリズム推進協議会に関する基本的事項

本法では、市町村が地域におけるエコツーリズム推進の中心的役割を担うことが求められています。

エコツーリズムを推進しようとする市町村は、当該市町村のほか、特定事業者、地域住民、NPO等自然観光資源又は観光に関し専門的知識を有する者、土地の所有者等その他のエコツーリズムに関連する活動に参加する者、関係行政機関、関係地方公共団体により構成されるエコツーリズム推進協議会（以下「協議会」という。）を組織することができます。

エコツーリズムを推進する地域においては、取組みを向上させていくために、さまざまな意見を取り込み、関係者の共通理解の下、進めていくことが求められます。そのため、関係者間の合意や意思決定を担う機関として協議会が重要な役割を果たします。協議会は、それらの意見を取りまとめてエコツーリズム推進全体構想（以下「全体構想」という。）を作成することができます。また、全体構想に沿った取組み状況をチェックし、全体構想及び取組みの改善を図っていく役割も期待されます。

なお、「認定エコツーリズム推進地域（仮称）」を目指す場合には、本基本方針に沿ってエコツーリズム推進協議会を設置し、全体構想を作成する必要があります。

1 協議会の組織化

（1）幅広い主体が参加することの必要性

エコツーリズムの推進に当たっては、プログラムの充実や実施による効果の波及、ルールの浸透、利害関係の調整等を図るためにさまざまな主体の連携が必要となります。そのため、地域の自然環境や観光活動の状況、農林水産業や農山漁村の活性化との関連等の特性に応じて多様な主体の参加の機会を確保することが求められます。

特に、対象となる特定自然観光資源又は当該特定自然観光資源の所在する区域において動植物の採捕の権利が設定されている場合であって、その権利を有する者の代表者がいる場合には、その代表者の参加が必要です。

また、自然観光資源を対象とした保全再生活動等に関わる団体の参加も望めます。

加えて、必要に応じて広域行政機関としての都道府県や国などの関係行政機関の参加を求めることも重要です。特に、特定自然観光資源の所有者が国や都道府県である場合には、所有している省庁の地方支分部局又は都道府県の参加が必要です。

さらに、全体構想に係る地域において、国又は都道府県が所有する土地があり、当該国又は都道府県から協議会への参加の申入れがあった場合は、土地の所有者たる国の地方支分部局又は都道府県を構成員として加えることが必要です。

(2) 協議会の体制

協議会の規模については、効率的な運営に留意し関係団体の代表等から構成するなどにより適切なものとするのが求められます。また、円滑な運営を確保する観点から、運営事務を取り仕切る事務局を市町村に設置することが求められます。ただし、既にエコツーリズム推進に係る協議会があり、その事務局が市町村以外に設置されている場合などは、状況に応じてその事務局と適切に役割分担する手法も取り得ます。

2 協議会の運営

合意形成に当たっては、地域の実情に応じて客観的な情報を用いたり、建設的な意見を集約し、自然観光資源の持続的利用など共通の利益の確認に努めることなどにより、効率的な運営に留意する必要があります。

また、協議会の構成員は、お互いに協力して積極的に協議会の運営並びに全体構想の推進に努めることが求められます。

さらに、協議会には全体構想作成後もそのチェックや必要に応じた見直しなど継続的な運営が求められることから、定期的に協議会を開催することが必要です。

その際、地域において観光振興や地域づくりに関わる類似した協議組織が既に設立されている場合は、共同の開催や部会制とするなど構成員に配慮した運営とすることも検討される必要があります。

協議会はその開催などについて原則公開とし、運営に係る透明性を確保することが求められます。より適切な協議会の運営や取組みの推進とするために、地域内の専門家だけでなく、必要に応じて、外部の専門家や研究者等からの意見聴取を行うことも必要です。さらに、多様な意見や情報を把握するため、シンポジウムや説明会の開催等を通して、幅広い主体の意見を取り入れるだけでなく一般住民に対しても参加促進を促していくことも望まれます。

3 活動状況の公表・報告

市町村は、協議会の活動状況を毎年取りまとめて、主務大臣に報告を行うこととされていますが、あわせて広く一般に公表することが求められます。

協議会は、会議などでの協議事項や決定事項等を、関係者間での共有化に努めることとします。この際、協議の結果だけでなく、結果に至るまでのプロセスを必要に応じて共有することは、エコツーリズムに対する理解を広め、適切な推進につながります。

第3章 エコツーリズム推進全体構想の作成に関する基本的事項

協議会が作成する全体構想は、基本方針に則して、エコツーリズムを推進する地域（以下「推進地域」という。）や、対象となる自然観光資源、エコツーリズムの実施の方法、自然観光資源の保護・育成、協議会の参加主体と役割分担、その他エコツーリズム推進に必要な事項を定めるものです。

全体構想は、上記に挙げた各項目について、以下の基本的事項に留意しながら作成するものとします。

1 エコツーリズムを推進する地域

（基本的事項）

推進地域の設定に当たっては、まず地域が目指すエコツーリズム推進の背景や目的、取り組むに際しての基本的な方針や課題解決の方向性といった事項を明確にすることが望まれ、その上で自然環境の特性や社会的側面から一体性を考慮し、過大又は過小にならないよう合理性のある範囲とする必要があります。

また、一つの推進地域の中にも異なる特性を持つ区域が併存する場合には、必要に応じてそれらを適切に区分（以下「ゾーニング」という。）し、それぞれの特性に応じたエコツーリズムの実施の方法を示す必要があります。

上記のように自然環境の特性や社会的側面を考慮した結果によっては、複数の市町村にまたがる推進地域を設定することも考えられます。その場合には複数市町村を一体として全体構想を作成することが望まれます。

その一方で、一つの市町村の中に海沿いの地域や山あいの地域など異なる自然環境の特性や社会的側面を持つ地域が複数あり、ゾーニングによる対応が困難な場合には、一つの市町村に複数の協議会が設置され、それぞれにおいて全体構想が作成されることも考えられます。

（全体構想に記載すべき事項）

- ・ 推進の背景と目的
- ・ 推進に当たっての現状と課題
- ・ 推進の基本的な方針
- ・ 推進地域の範囲及び設定に当たっての考え方
- ・ 推進地域のゾーニングの考え方（ゾーニングする場合）
- ・ ゾーニングの取扱方針

2 対象となる自然観光資源

(基本的事項)

エコツーリズムの対象となる自然観光資源には、自然環境に係る観光資源だけでなく、自然環境と密接な関連を有する風俗慣習や伝統的な生活文化に係る観光資源も含まれます。

「動植物の生息地又は生育地その他の自然環境に係る観光資源」については、クジラ、イルカ、ウミガメ、ホタル、チョウ、ブナの巨木などの「動植物」、海鳥の集団繁殖地やサンゴ礁、湿原などの「動植物の生息地・生育地」、滝や風穴、噴泉塔などの「地形・地質」といった資源が例として挙げられます。

また、「自然環境と密接な関連を有する風俗慣習その他の伝統的な生活文化に係る観光資源」については、棚田や魚垣（ながき）、半自然草原と火入れ、カバタ（湧水を家に引き込みその水を炊事や洗濯に利用する仕組み）などの資源が例として挙げられます。

そのほか、上記の自然観光資源に該当しない一般的な観光資源で、プログラムの企画、実施に当たって活用することが見込まれるものについても、あわせて全体構想到に記述しておくことも考えられます。

(全体構想到に記載すべき事項)

- ・対象となる主な自然観光資源の名称と所在地など
- ・その他の観光資源の名称と所在地など（参考情報）

3 エコツーリズムの実施の方法

エコツーリズムは、観光旅行者が自然観光資源について知識を有する者（以下「ガイド」という。）から案内又は助言（以下「ガイドランス」という。）を受け、自然観光資源の保護に配慮しつつふれあい、知識や理解を深める活動（以下「プログラム」という。）の実施によって推進されるものです。

また、エコツーリズムは人為的な影響を受けやすい自然観光資源を対象として実施されることもあることから、それらが利用によって損なわれないように留意する必要があります。そのためには適切な利用の方法を確認し必要に応じて明文化するとともに、その方法に従って実施すること（以下「ルール」という。）や、自然観光資源の状態などの実施の状況を監視し、その監視の結果に科学的な評価を加え（以下「モニタリング・評価」という。）これを反映させつつ実施することが重要です。

エコツーリズムの実施に当たっては、上記のルール、ガイドランス・プログラム、モニタリング・評価が特に重要な要素となることを踏まえつつ、以下に挙げるような各項目に留意して実施することが求められます。

(1) ルール

(基本的事項)

エコツーリズムにおけるルールとしては、自然観光資源が損なわれることを防ぐため、必要に応じて一定の強制力を持たせることによって遵守を図るものと、内発的な取り組みとして関係者間の意識啓発によって実施するものがあります。

その際、観光旅行者の安全確保や満足度の向上、地域の住民生活の質が観光によって損なわれることを防止すること等を目的としたルールについても必要に応じて検討することが求められます。

ルールの策定に当たっては、効率的に策定されるよう配慮しながら、それが実行されることにより影響を受ける幅広い関係者が議論に参加することが望まれます。

その際、議論や情報と合わせて、自然観光資源の持続的利用など、そのルールを遵守することによって得られる共通のメリットを分かりやすい形で共有することが肝要です。

また、ルールの運用に当たっては、観光事業者や観光旅行者だけでなく、地域住民に対しても周知徹底を図ることが求められます。この際、ルールを遵守することによって得られるメリットを分かりやすい形で提示したり、又はルールの運用状況をチェックする体制を整えるなど、形式的なものにならないように実効性の確保に留意する必要があります。

上記のように適切に運用されたルールに基づいて実施されるプログラムでは、観光旅行者は対象とする自然観光資源の損なわれていない本来の姿にふれあうことができる上、混雑が緩和されるなど快適な状態がもたらされることとなります。このため、質の高いツアーの実現につながり、観光旅行者にとっての満足度が高まることとなります。

(全体構想に記載すべき事項)

- ・ルールによって保護する対象
- ・ルールの内容
- ・ルールを適用する区域
- ・ルールの運用に当たっての実効性確保の方法

特定自然観光資源については、「4 自然観光資源の保護・育成」で詳述

(2) ガイダンス・プログラム

(基本的事項)

ガイダンスは、ガイドが直接案内・解説する方法が基本となりますが、補助的には観光旅行者が自ら理解するための解説板やガイドブックなどの文字による伝達、ウェブをはじめとする携帯端末等の情報機器(システム)を活用した伝達など、さまざまな手段があります。

また、ガイドには、職業的なガイドのほか、ボランティアガイド、あるいは地域の住民や農林漁業者とのふれあいや協働を通しての地域密着型の伝達といったさまざま

まなレベルが想定されます。

エコツーリズムの推進に当たっては、これらの各種のガイダンスを地域の現況やゾーニングの状況に応じて、適切にプログラムとして組み合わせながら計画、実施していくことが重要です。

プログラムの企画・実施に当たっては、表面的な情報や知識を伝えるだけでなく、その背景にある歴史や文化、地域との関わりなどを観光旅行者に効果的に伝えることが重要です。また、観光旅行者が楽しみながら生物多様性の奥深さなどに気づき、深い感動を得られるような内容となるよう留意する必要があります。

ガイドは、自然環境の成り立ちや保全の必要性、観光利用とそれに伴う自然環境への影響の現状、人の生活と自然の関わりなど、地域の自然観光資源に関する情報を収集することにより、深い知見を有していることが基本となります。

上記に加えて、観光旅行者の関心に応えられるように、文化や伝統、習慣、食、言語といった地域についての広範な知識をあわせ持っていることが望まれます。さらに、観光旅行者が楽しみながら上記の情報や知識を理解できるようにプログラムを企画する能力や、効果的に情報を伝える能力（インタープリテーション技術）、エンターテインメント性、ホスピタリティ精神、観光旅行者の知識レベルや関心の度合いに応じた柔軟な対応、安全確保といったさまざまな能力もあわせて望まれます。

上記のような能力を備えたガイドによって実施されるプログラムは、内容に見合った対価を得られる高質なものとなります。

（全体構想に記載すべき事項）

- ・主なガイダンス・プログラムの内容
- ・実施される場所
- ・プログラムの実施主体

（3）モニタリング・評価

（基本的事項）

モニタリング・評価は、地域の自然観光資源などが損なわれないよう調査・把握する行為です。

その際、科学的かつ客観的な視点から実施されることが望まれますが、特に、原生的な自然が比較的多く残り、脆弱性が高い地域では、よりきめ細かなモニタリングが必要となることから、国や大学などの研究機関が実施する調査などとも連携しつつ、専門家や研究者の積極的な関わりを得ながら実施していく必要があります。

一方、里地里山など人の生活と自然環境が密接に関連する地域では、ガイドや地域住民が主体となって状況把握に努め、専門家や研究者に適宜チェックを受けられるような仕組みを構築して実施することが望まれます。さらに、観光旅行者と協働の下に実施する方法もあります。

このようなモニタリングを進める上での対象の選定に当たっては、その状態を的確かつ継続的に把握し、客観的に評価できるように留意する必要があります。

そして、継続的な実施のためには、日常的に出入りする土地所有者や地域住民、ガイド等が幅広く参加し、自然観光資源の状態を把握するなど、可能な限り効率的に実施しつつ、各段階において適宜専門家の助言を得ることのできるような仕組みを構築することも重要になります。

この際、風俗慣習その他の伝統的な生活文化に係る観光資源についての評価に当たっては、地域の人々の経験的な評価が必要になる場合もあります。

なお、上記のモニタリング・評価の結果は、協議会などの関係者が参加する場で協議することによってガイドンス・プログラムやルールなどエコツーリズムの実施の方法を見直すなど、評価結果を適切に反映する仕組みを構築することが重要です。

(全体構想に記載すべき事項)

- ・モニタリングの対象と方法
- ・モニタリングに当たっての各主体の役割
- ・評価の方法
- ・専門家や研究者等の関与の方法
- ・モニタリング・評価の結果の反映の方法

(4) その他

ア 情報提供

(基本的事項)

市町村及び協議会は役割に応じて、地域の住民や観光旅行者に対して地域固有の魅力や魅力を伝え、ルールの内容を周知するとともに、地域における豊かな活動を実現するための情報を適切な方法とタイミングで提供していく必要があります。

また、継続的な推進のためには、参加者として訴えかけるべき対象を適切に把握しながら、より効果が見込まれる方法により情報提供を行うことが望まれます。

(全体構想に記載すべき事項)

- ・主な情報提供の方法

イ 人材育成

(基本的事項)

ガイドンスは地域全体での取り組みが必要であり、ガイドのみならず住民にも地域の魅力を伝える力が望まれます。そして、各種のガイドンスの質は伝える人の知識や技術、ホスピタリティ等の意識によることから、幅広い人材の育成が求められます。

とりわけ、観光旅行者を直接案内するガイドはその有する能力がプログラムの質に大きな影響を与えるものであり、積極的に人材育成を図っていくことが望まれます。そのための主な方法としては、知識や技術、意識の向上を図るための研修会の開催や、ガイド同士の情報交換の機会提供、他の取り組み地域の視察などがあげられます。

(全体構想に記載すべき事項)

- ・ガイドなどの育成(研鑽)の方法

4 自然観光資源の保護・育成

「自然観光資源」についてはそれぞれ地域に固有の特性を持っており、その存在と特性を把握し、保護・育成の措置を計画し、着実に実施していくことが必要です。自然観光資源の中でも、観光旅行者やその他の者の活動により損なわれつつある又は損なわれるおそれがあり、法的に保護のための措置を講ずる必要があるものを「特定自然観光資源」として指定することができます。

(1) 特定自然観光資源

(基本的事項)

ア 特定自然観光資源の指定

市町村長は、協議会が作成した全体構想が国に認定された場合にその「認定全体構想」に従って、特定自然観光資源を指定することができます。指定に当たっては、あわせて所在する区域の設定を行う必要があります。

この際、土地所有者、使用収益権者、漁業権者等の同意を得る必要があります。ただし、他の法令により適切な保護がなされている自然観光資源として主務省令で定められているものについては、二重規制となるため指定できません。さらに、既存の法令・計画及び他の公益との整合性に留意することが必要です。

特定自然観光資源の指定に当たっては、学術的な視点や、地域の住民に大切にされているなどの地域社会的な視点のほか、集客力など観光的な視点等が考慮されます。所在する区域の設定に当たっては、指定する特定自然観光資源の特性や周辺の自然環境の特性、社会的側面を考慮し、必要以上に広範囲に及ばないよう合理的な区域の設定に留意することが求められます。

イ 立入り制限による利用調整

特定自然観光資源が多数の観光旅行者その他の者の活動により著しく損なわれる恐れがあるときは、市町村長は、当該特定自然観光資源の所在する区域内への立入りについて、立入り規制期間の設定、立入り時における市町村長の承認の義務付け、立入り人数の上限の設定を行うことができます。

立入りの承認に当たって条件を設ける場合は、合理性・透明性に留意する必要があります。

立入り制限地域を設定する際の土地所有者等の同意を取るに当たっては、市町村長は土地所有者等に対して規制の内容を十分説明することが重要です。

ウ その他の保護・育成の措置

保護・育成の方法としては、上記の法的なルール以外に、木道や柵の整備といった物理的な方法、日々の手入れや管理による方法等が考えられます。

保護・育成の措置を計画し実施していく上では、既存の制度・計画との整合を図るとともに、必要な諸事項について協議会で協議を行うことが求められます。

エ 保護・育成の方法の公表

市町村長は、特定自然観光資源を指定した場合には、標識の設置によって利用者等にその旨を的確に伝えるとともに、名称及び所在する区域並びにその保護のために講ずる内容を公示する必要があります。

(全体構想に記載すべき事項)

- ・ 特定自然観光資源の名称、所在地、区域、指定の理由
- ・ 特定自然観光資源の保護・育成の方法
- ・ 立入り制限(利用調整)の区域における制限の理由、期間及び上限の人数等
- ・ 特定自然観光資源の保護・育成の方法の公表及び周知の方法
- ・ 特定自然観光資源の保護・育成の方法に関する管理体制
- ・ 特定自然観光資源に係る主な法令・計画等

(2) その他の自然観光資源

(基本的事項)

その他の自然観光資源についても、その存在と特性を把握し、その価値が損なわれないよう保護・育成の措置を計画し、着実に実施していくことが必要です。

保護・育成の措置については、物理的な方法、手入れや管理による方法、ルールによる利用の誘導が考えられます。

保護・育成の措置を計画し実施していく上では、既存の制度・計画との整合を図るとともに、必要な諸事項について協議会で協議を行うことが求められます。

(全体構想に記載すべき事項)

- ・ 自然観光資源の保護・育成の方法
- ・ 自然観光資源に係る主な法令・計画等

ルールに関する事項については、「3(1)ルール」で記載

5 協議会の参加主体

(基本的事項)

参加する主体はそれぞれの特性や立場を理解した上で連携・協力し、適切に役割分担することが求められます。

役割分担としては、ルールの周知徹底や運用状況の監視、ガイダンス・プログラムの企画・実施、モニタリングの実施、広報などが想定されます。

(全体構想に記載すべき事項)

- ・協議会に参加する者の名称又は氏名、その役割分担

6 その他エコツーリズムの推進に必要な事項

(1) 環境教育の場としての活用と普及啓発

(基本的事項)

エコツーリズムの一連の取組みを通して環境教育の効果が発揮されます。

具体的には、観光旅行者はガイダンス・プログラムへの参加をきっかけとして自然に対する理解が深まります。また、知識の取得や理解にとどまらず、人間と環境との関わりについて、正しい認識に立ち自ら責任ある行動をとることのできる人材の育成につながります。そのため、実施されるガイダンス・プログラムは、自然の不思議さ、大切さに気づく場となるようにする必要があります。

地域の関係者にとっては、エコツーリズムの一連の取組みや観光旅行者等の参加者との関わりを通して、地域の宝としての自然観光資源の大切さを改めて認識し地域の理解や環境問題への関心を深めることとなります。

取組みの経過を住民に広報するとともに、学校教育や公民館活動等との連携により、積極的に普及啓発していくことが望まれます。

(全体構想に記載すべき事項)

- ・ガイダンス・プログラムの実施に当たっての留意点
- ・地域住民に対する普及啓発の方法

(2) 他の法令や計画等との関係・整合

(基本的事項)

全体構想は、他法令や関係法令に基づく各種計画などと調整し、調和を保つべきものです。

(全体構想に記載すべき事項)

- ・主な関連法など

(3) 農林水産業や土地所有者等との連携・調和

(基本的事項)

地域の農林水産業や土地所有者等との連携により、農林水産業の発展とエコツーリズムの推進の相乗効果が発揮されることが期待できます。

また、農山漁村地域においてプログラムが実施される場合には、農林水産業や土地所有者等の理解を得ながら実施していくことが望まれます。

(全体構想に記載すべき事項)

- ・農林水産業などとの連携方策や配慮事項

(4) 地域の生活や習わしへの配慮

(基本的事項)

ガイドンス・プログラムを実施する場合には、観光旅行者などの行為が地域住民の生活に悪影響を及ぼすことのないように配慮する必要があります。

特に、信仰の対象となっている自然観光資源やガイドンス・プログラムの対象となる伝統的な生活文化・慣習等に対しても、それらを尊重することが必要です。

(全体構想に記載すべき事項)

- ・地域の生活や習わしに対する配慮事項

(5) 安全管理

(基本的事項)

ガイドンス・プログラムの企画・実施に当たっては、あらかじめ危険の可能性を想定して、それらを事前に回避する方策を立てることが求められます。

万が一の事故など緊急時に備えて、安全確保や連絡体制の整備など、地域で安全対策を協議する関係諸機関と日頃から連携を図っていくことが重要です。

(全体構想に記載すべき事項)

- ・安全管理に関する事項

(6) 全体構想の公表

(基本的事項)

市町村は、協議会が全体構想の作成、変更・廃止を行ったときは、広く一般に公開し、主務大臣へ報告を行うこととされています。

(全体構想に記載すべき事項)

- ・公表の方法

(7) 全体構想の見直し

(基本的事項)

協議会は、定期的に、モニタリングの結果や構想の進行状況を評価し全体構想を点検することが求められ、必要が生じた場合には全体構想の変更を検討することが望まれます。

(全体構想に記載すべき事項)

- ・点検及び見直しの時期

第4章 エコツーリズム推進全体構想の認定に関する基本的事項

1 認定の趣旨

全体構想の認定は、協議会が作成した全体構想について主務大臣が行うものです。全体構想が認定されると以下のようなメリットがあります。

- ・これまで保護措置が講じられていなかった自然観光資源を、必要に応じて特定自然観光資源として指定することで、汚損・損傷・除去及び観光旅行者に著しく迷惑を及ぼす行為の禁止、特定自然観光資源が所在する区域への立入りの制限などの保護措置を講じることができ、持続的かつ質の高い自然観光資源の利用が可能となります。
- ・国によって、法の基本理念に基づく、他の地域のモデルとなる取組みとして認められることになり、地域のブランド力が高まるとともに、国が積極的にその周知に努めることから、集客力の向上につながることを期待されます。

2 認定の手続き

市町村は、その組織した協議会が全体構想を作成した際は、当該全体構想について、環境省又は国土交通省の地方支分部局を通じて主務大臣に認定の申請を行います。その際、自然的経済的社会的条件からみて、一体としてエコツーリズムを推進することが適当であると判断し、隣接する市町村が共同して全体構想を作成した場合にあっては、当該市町村が共同で認定申請を行うことができます。

3 認定基準

全体構想の認定基準は、以下のとおりとします。

以下に示す事項その他の事項が基本方針に適合するものであること

- ・当該市町村、特定事業者、地域住民、特定非営利活動法人等、土地の所有者等、関係行政機関及び関係地方公共団体などエコツーリズムを推進しようとする地域における関係者が、効率的な運営に配慮しつつ、幅広くかつ片寄りなく協議会に参加していること。
- ・協議会に参加する者の間で、協議会における協議内容、モニタリング結果などの情報を相互に共有し、関係者間の連携が図られていること。
- ・協議会の構成員に加える旨の申入れがあった際の手続き等、協議会の組織及び運営に関し必要な事項が適切に整備されていること。
- ・協議会が透明性を確保しつつ運営されていること。
- ・全体構想などの公表の方法が適切であること。
- ・他法令や、関係法令に基づく各種計画との整合性が図られていること。
- ・エコツーリズムを推進しようとする地域が周辺の市町村にまたがる場合は、当該

市町村との連携が図られていること。

- ・自然観光資源の保護・育成のために講ずる措置の内容が適切であること。
- ・特定自然観光資源を指定する場合にあっては、あらかじめ市町村長が土地の所有者等の同意を得ていること。
- ・全体構想が定期的に点検され、必要に応じて見直しの検討がなされると見込めること。

自然観光資源の保護・育成のために講ずる措置その他の全体構想に定める事項が確実かつ効果的に実施されると見込まれるものであること

- ・特定事業者、自然観光資源の保護・育成のために講ずる措置の実施者などが存在し、その役割分担が明確にされていること。

4 認定の取消し

主務大臣は、エコツーリズムを推進する地域における自然観光資源に著しい影響を与えているとき、プログラムの実施主体が存在しなくなったときなど、認定全体構想に従ってエコツーリズムが推進されていないと認めるとき、又は全体構想が基本方針に適合しなくなったと認めるときは、文書などにより必要な技術的助言を行い、さらに改善が見られない場合にあっては、その認定の取り消しを行います。その際、主務大臣は、当該市町村に理由を付して通知するとともに、インターネットなどにより公表します。

5 認定全体構想の周知

関係省は、認定全体構想の周知に当たっては、関係団体及び関係地方公共団体などとも連携の上、政府広報、インターネットなど各種媒体を活用し、観光旅行者、特定事業者、旅行業界団体など各主体に応じた適切な方法により、積極的かつ効果的にその周知に努めます。

第5章 生物の多様性の確保等のエコツーリズムの実施に当たって配慮すべき事項その他エコツーリズムの推進に関する重要事項

1 生物多様性の確保

地球上の多様な生物は、誕生から約40億年の歴史を経て環境に適応し、環境との相互作用を通して進化してきたものであり、森林、河川、湖沼、サンゴ礁などの生態系の中でそれぞれ役割を担って相互に影響しあい、バランスを維持し、長い年月をかけて地球環境の形成に寄与してきました。豊かな生物多様性とは、こうしたバランスが維持され、自然環境が生態系、種、遺伝子の各レベルで健全に保たれている状態を意味するものであり、飲料水や食料の供給、気候の安定など、さまざまな恵みを人間にもたらす源泉であるとともに、人間のみならず、すべての生物の生存基盤となっています。

このような豊かな生物多様性に根ざした地域固有の自然環境や生活文化は、それ自体がエコツーリズムの題材として大きな観光的価値をもっています。その利用に当たっては、順応的管理を基本とし、本来の価値を損なわないよう十分配慮を行うとともに、積極的に保護・育成の方策を講ずることなどによって、さらにその価値を高めるような取組みも必要となります。特に、湿原、高山植生など脆弱性の高い自然の地域においては、必要に応じて入込数の制限を行うなど利用調整を行うとともに、地域の宝探しなどを通じて、新たな自然観光資源を発見・創出することによって、特定の地域に利用が集中しないような配慮も必要となります。

また、人間活動の活発化に伴って、野生生物の本来の移動能力を超えて、意図的・非意図的に国外や国内の他の地域から導入される外来種によって、地域固有の生物相や生態系に悪影響を与えないよう配慮することも重要です。外来種による影響は、生態系や種レベルに留まらず、観光資源のため他の地域のメダカやホテルを放つことなどによって生じる遺伝子レベルでの攪乱にも留意する必要があります。

一方、人との関わりの中で維持されてきた里地里山など自然に対する人間の働きかけが縮小撤退することによって生物多様性が劣化している地域においては、維持管理の活動をプログラムに組み込むなどエコツーリズムの活用によって生物多様性の回復も期待されます。

観光旅行者は、プログラムでの体験を通じて地域の自然に対する理解が深まるとともに、環境保全に対する意識が啓発され、日常の生活の場においても、環境保全に配慮した行動をとるようになることが期待されます。また、地域においては、観光旅行者との交流などを通じて、地域の人々がその自然の価値に気付き、保全活動などに積極的に参加する効果が期待されます。

このような地域が主体となった取組みを通じて、地域のブランド力が高められ、さらに集客力の向上につながるといった相乗効果が期待されます。

2 普及啓発の推進

政府は、エコツーリズムの実施状況などに関する情報の収集、整理、分析を進めるとともに、広域観光圏の形成、農山漁村の活性化、環境教育・生涯学習など各種関連施策とも有機的な連携を図りつつ、観光旅行者、特定事業者、地方公共団体などに対し、各主体に応じた積極的かつ効果的な情報提供を行います。

地方公共団体に対しては、エコツーリズムが自然的経済的社会的条件によって、その導入手法や効果などが異なることを踏まえ、他地域における取組み事例などに関する情報提供や情報交換の場の提供を進めます。

観光旅行者に対しては、エコツアーへの参加を促進するため、各地で実施されているガイドンス・プログラムに関する情報やエコツアーの楽しさ、参加することの効用などについて、各種媒体を活用して情報提供を行うとともに、特定事業者に対しては、ガイドンスの質の向上などを目的として、各地でのガイドンス事例などの情報提供に努めます。

また、都道府県及び市町村は、エコツーリズムが地域の生物多様性保全、観光振興、地域振興、環境教育の推進などに寄与するものであることを踏まえ、関係部局が横断的に連携・協力して、観光旅行者、特定事業者、地域住民などに対して、積極的かつ効果的にその周知に努めることが望まれます。

3 子どもの視点に立った継続的な取組みの推進

地域においてエコツーリズムの取組みを継続的に推進していくためには、プログラムの企画・運営に当たって、「子ども」を対象とした視点が重要となります。このことは、プログラムへの参加の潜在ニーズが、家族連れにおいて大きいことに加え、子どもの頃から自然とふれあうことで、大人になってからも継続的に参加するなど、将来にわたってのニーズの発掘にもつながります。

また、エコツーリズムに取り組む地域においては、宝探しやプログラムづくりなどに地域の子どもたちが主体的に関わっていくことも重要です。子どもたちが主体的に関わることができれば、地域が一体となった取組みへの発展が容易になるとともに、子どもたちが地域の自然への理解を深め、地域に対して愛着をもつことで、将来的な地域の後継者づくりにもつながることが期待されます。

これらの取組みを進めていくに当たっては、学校教育との連携も必要です。「子ども農山漁村交流プロジェクト(小学生の農山漁村での長期宿泊体験活動)」では、受け入れ現場におけるエコツーリズム関係者の関わりも期待されており、今後、関連施策との連携強化を図っていきます。

4 技術的助言

関係省は自然環境の保全、観光振興、地域振興、環境教育の場としての活用などの観点から、エコツーリズムを推進しようとする地域における自然情報や社会情報、他地域におけるエコツーリズムの取り組み事例・ノウハウ、他法令及び関連施策との関係などを踏まえ、市町村や協議会に対して必要な技術的助言を行います。

都道府県は、エコツーリズムを推進しようとする地域における広域かつ詳細な自然的・経済的・社会的情報を有しており、それらの情報提供や、条例や関連施策との関係、隣接地域との調整などについて、市町村や協議会に対してきめ細かな技術的助言を行うことが期待されます。

5 エコツーリズムの推進体制

環境省、国土交通省、文部科学省、農林水産省は、法の基本理念である自然環境の保全、観光振興、地域振興、環境教育の場としての活用が調和を保ち進められているか協議会の活動状況を定期的に把握するとともに、国の責務であるエコツーリズムに関する広報活動などを連携して積極的に進めます。このため、4省を中心にしたエコツーリズム推進連絡会議での連絡調整などを通じ、他の関係行政機関を含めた連携の一層の強化を図ります。また、エコツーリズム推進連絡会議では、必要に応じてエコツーリズムの適正な推進などに関して有識者などから助言を受けます。

政府は、地方公共団体の担当者を対象として開催する会議などを活用して、地方公共団体と緊密な情報交換を行い、エコツーリズムに取り組む地域が抱える課題などを適切に把握するとともに、その結果を施策に反映させるなど地方公共団体との連携の一層の強化を図ります。

市町村は、エコツーリズムを推進しようとする地域の自然的・経済的・社会的条件などを踏まえ、あらかじめ都道府県及び周辺市町村の意見を聴くことなどにより、都道府県及び関係市町村との連絡調整などを円滑に行うことができるよう努めることが望まれます。

都道府県は、市町村からの要請などに応じて、積極的に技術的助言を行ったり、関係市町村などとの連絡調整に努めることが望まれます。

また、地方公共団体内でも、環境部局及び観光部局をはじめ、農林水産、教育、交通など関連部局間の横断的な連携が図られることが望まれます。